

## 「個」の時代に「公」を育むには ～次世代に引き継ぐ“つながり”のために～

2023 年 8 月  
研究会員代表幹事  
恵崎 恵

### 1. はじめに

「つながり (Relationship)」、「共感」、「対話」、「相手への理解 (Respect)」。

これらは昨年度、「誰もが豊かに暮らせる社会は、どうすれば実現できるのか～対立・分断・あきらめを乗り越えて～」というテーマの下で行われた研究会員活動において、各フォーラムからほぼ共通して出されたキーワードです。

「豊かさとは何か」を探求する中で、「物質的豊かさも必要だが、精神的豊かさの方が求められているのではないか」、「それぞれが豊かさを追求すると対立・分断が生じかねないが、どうすれば乗り越えられるのか」などの議論を経てたどり着いたものであり、成熟社会を迎えている現代の日本において、改めてその重要性が問われているキーワードと言えます。

「つながり」、「共感」、「対話」など、これらの言葉はすべて、「私」と「相手」の間における行為や関係性に関わるものです。ここで私は、福澤諭吉が *society* を「人間交際」と訳したというエピソードを思い出しました。江戸時代までの日本には、現代でいうところの「社会」にふさわしい実体が生まれていなかった中で、福澤は *society* が「人と人との交わり」であることを強調したのです。福澤の訳語に表されているように、社会を構成するのは「個人」であり、一人一人の「個人」が交わり合って社会ができる。個人の「交際」の在り方が社会を形作るといっても過言ではありません。では、社会の中における「個人」の在り方は、時代の流れとともに、どのように変わってきたのでしょうか。

20 世紀は工業生産の拡大が経済成長をけん引し、日本は人口増加を追い風として生産・消費の両面で高度成長を達成し、経済大国へと駆け上がりました。この時代においては、「会社人間」、「企業戦士」という言葉に象徴されるように、個人は良き組織人・会社人間として、個性よりも協調性、組織に対する勤勉性が求められました。

一方、21 世紀に入ると様相は変わり、グローバル化の進展やデジタル化の進展に伴い、「個人」がこれまで以上に社会活動の主体として影響力を増しています。

代表的な例をいくつか挙げます。一つ目は物流。みなさんも、お店に足を運ぶことなく、インターネットサイトで自宅から商品を簡単に購入又は販売した経験があるで

しょう。越境電子商取引の利用拡大により、個人でも簡単に国境を越えた取引が可能になっています<sup>1</sup>。

二つ目に情報。SNS などを通じて、個人が意見を簡単かつ自由に発信できる時代です。また、インターネットにアクセスすることで、個人が瞬時に、膨大な量のデータにアクセスし、必要な情報を検索することもできるようになりました。

三つ目に労働。1990 年代以降の長期不況を通じて雇用の長期安定や賃金上昇を以前ほど期待できなくなったこともあり、個人は組織に依存するよりも自らの意思と責任に基づいて人生を選択するようになってきました。加えて、テレワークの普及により、個人の住みたい場所に依拠して働き方を選ぶ人が増えています。

このような一連の社会の変化は、個人の価値観の多様化を後押ししているように見えます。

では、個人の「交際」の在り方はどうでしょうか。インターネットの普及によりコミュニケーションの形が変わり、海外や遠隔地の人ともいつでも交流が可能になるなど、従来よりも個人が多様な経験と交流ができるようになりました。一方で、近代化の過程を通じて地縁（＝地域共同体）、血縁（＝家族共同体）、社縁（＝職場共同体）が衰退する中で、かつては「自助」、「互助」、「共助」により解決されていた問題が、「公助」の問題として捉えられることが多くなってきています<sup>2</sup>。また、地縁・血縁・社縁の衰退した「無縁社会」では、個人の自由と自己責任を重んじるリバタリアン（自由至上主義）的な価値意識や行動様式が親和性をもつ、例えば若い世代では労働を「社会に対する義務」だとは考えず、「働きたくない人は働かなくてもよい」と考える傾向がある、社会全体や子孫のことより自分の利益を優先しても良いと考える傾向があるという指摘もあり<sup>3</sup>、「互助」や「共助」がさらに薄れていく可能性もあります。

先に参照した福澤諭吉は「人間交際」で発揮されるべきものが「公德」であり、「人間交際」の世界では「私」の範囲より広い範囲の役割を担うべきであり、それを「公務」と定義しています。

昨年度の議論の結果、必要なものとして「つながり」などのキーワードが出てきたように、社会を構成する一人ひとりが「互助」・「共助」・「公助」といった「公（こう）」の意識を日々考え実践していくことが、よりよい社会・豊かな社会を次世代に引き継ぐために必要なのではないのでしょうか。そのためには、「個人」の在り方の変化に合わせて、今の社会システムそのものも見直す必要があるのではないのでしょうか。

今年度の研究テーマを「『個』の時代に『公』を育むには～次世代に引き継ぐ“つながり”のために～」に設定した背景には、こうした問題意識があります。

<sup>1</sup> 令和 4 年における航空貨物の輸入許可件数は初めて 1 億件超え。対前年比約 15%増、4 年前比で約 183%増。

<sup>2</sup> 子育てについては、共働き世帯が増加する中で保育所が整備され、最近では就労に関わらず子育て支援の取組が存在。孤独孤立についても、社会の問題として令和 5 年 5 月 31 日に孤独・孤立対策推進法が成立。

<sup>3</sup> 坂井昭夫「“無縁社会”考」2012 年、米田幸弘「個人化時代の労働観」2020 年

## 2. 官も民も「公」を担う

現在の日本の様々な社会システム<sup>4</sup>は、明治維新以来の欧米化・近代化の過程においてその礎が築かれ、戦後の急速な経済発展とともに確立してきました。先人の努力の積み重ねにより、世界の様々な社会と比べてみても、日本においては相対的に平和で安全・安心、公平・公正な社会が実現していると言えるでしょう。

しかしながら、様々な局面変化が生じている中、官も民も「公」を担って社会システムをアップデートすることが必要なのではないのでしょうか。

ここで、「公」とは何かを確認しておきたいと思います。「公」には主に二つの意味があります。一つ目は、社会の統治者やその対象となる国家という意味。平安時代の支配者層である貴族は「公家」と呼ばれ、明治時代以降も、「公=お上」や「公=官」として認識されてきました。二つ目は、社会全般をさす「公共」や「公衆」など、英語では「Public」といわれる概念。福澤諭吉の言葉でいえば、「私」の範囲より広い場所での自分の役割のことです。本稿では、後者の「公」について、皆さんと一緒に考えたいと思います。

一方で日本では、「公（おおやけ）」を前者の意味で捉えがち、制度を含む社会システムについてもお上（国・権威）がなんとかしてくれるという意識が強いのではないかと、という指摘もあります。例えば評論家の山口周氏は、日米のパニック映画に構造的にこの意識の違いが表れていると言います。ハリウッド映画では、一人の個人が公（Public）の問題意識を持って立ち上がり、世界を救うという結末が多い一方で、日本ではウルトラマンにしてもゴジラにしても、危機に対して世界を救うのは政府あるいは政府から依頼を受けた人間だということです。オランダの心理学者ヘールト・ホフステードも、日本人は権威に依存する傾向が強い、と指摘しています<sup>5</sup>。

これら日本人の公私の観念については、社会のパラダイムが成長から成熟へ、人口増から人口減へとシフトする中で再考が求められていると思います。グローバル化・デジタル化の進展に伴う「個人」化は、共同体の意識の低下など、様々な社会課題を私たちに突き付けています。その解決のためには、日本社会を形作っている様々な社会システムもアップデートする必要があるのではないのでしょうか。

特に今後日本が直面する人口減少問題は深刻です。人口増加局面においては、需要が供給に合わせればよかったですのですが、人口減少局面においては、供給が需要に合わせる必要が出てきます。人口減少局面では、過剰設備の廃棄も新たな問題になると言われていますが、国が制度を変えれば解決するという問題ではなく、また、ひとつの産業分野で解決を図ればよいという問題でもなく、社会を形作る民間企業も個人も含めて、「公」の役割を果たして、連携して横串で社会システムをアップデートしていく

<sup>4</sup> ここでいう社会システムとは、政府の作る制度や各産業分野を縦割りで見るとは横串で見て、生活者・消費者に価値を創造・提供するもの。

<sup>5</sup> G.ホフステード「多文化世界 違いを学び共存への道を探る」2009年

ことが必要になっています。

「新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画 2023 改訂版」(令和 5 年 6 月 16 日)にも、「民間も公的役割を担う社会を実現」として、「多くの社会的課題を国だけが主体となって解決していくことは、困難である。(中略)社会的課題の解決の担い手も、既存企業のみならず、スタートアップ、大学や NPO など、多様化していくことが不可欠であり、民間が公的役割を担える社会を実現していく。」といった記述があります。

民間企業においても、SDGs やパーパス経営など、社会課題を解決することそのものを事業に組み込む潮流ではありますが、社会課題を解決するために業界を超えた構想を描き、その実現に向けて連携していくこと、またそれを実施する人を作ることが求められているのではないのでしょうか。

このように、「公」の社会を実現するために、官民で連携してどのような社会システムをどのようにアップデートあるいはデザインしていくべきでしょうか。現在の成熟した社会を次世代によりよい形で引き継ぐために、日本社会のあるべき姿を見据えてどのような「問い」(本質的な課題)を立てるか、議論いただきたいと思います。

課題設定については、各フォーラムの議論に応じて、総論的な分野に着目していただいてもよいですし、様々な切り口(社会課題)の中で重要と思われる分野を選んでいただくのも一案です。以下、切り口の例をいくつか挙げますが、このほかにもあるでしょうし、これらの切り口も縦割りで存在するのではなく相互に関連する<sup>6</sup>ものとも思われます。いずれにせよ、個々人の次元に限定せず、官民双方が連携し、「公」について考え実践できるように、社会システムの何をどのようにアップデートすべきなのか、考えていただければと思います。

なお、各フォーラムで着目した分野については、なぜその分野を選んだのか、理由も明確にしていいただければと思います(分野選定にあたっては、「どのような社会を次世代に引き継ぎたいか」という将来ビジョンの設定も重要です)。

## 少子高齢化

日本の将来推計人口が公表され、50 年後の人口は約 8,700 万人になるとの予測が示されました<sup>7</sup>。また、2066 年には 1 割が外国人との予測も示されました。人口減少に伴う労働力不足など、経済社会への影響は深刻です。少子高齢化の問題の本質的な課題はなんのでしょうか。

## 教育

「リカレント教育」、「リスキリング」といったワードが重要になっているように、人生の初期段階だけで学びを終えるのではなく、いつでも何度でも社会と教育機関

<sup>6</sup> 例えば、少子高齢化の課題を考える中で、教育や働き方が本質的な課題として出てくるかもしれません。

<sup>7</sup> 国立社会保障・人口問題研究所(令和 5 年推計)

の間を行き来することにより自分と社会をアップデートしていくことが求められています。一方で教育格差の問題も依然としてあります。現在の教育の問題の本質的な課題はなんでしょうか。

### 働き方

働き方は大きく変化しています。「会社から与えられるもの」から「個人が自らのキャリアを選択する」時代となっており、デジタル化の進展により、地方に移住しつつテレワークを選択する者も増えてきています。一方で労働市場の流動性は、諸外国と比較すれば依然として低い状態です。現在の雇用システムの本質的な課題はなんでしょうか。

### マイノリティ（外国人、LGBTQ など）・人権

日本の将来推計人口の中で、2066年には1割が外国人との予測が公表されました。また、日本のLGBTQの割合は約10%と言われています。英国のジャーナリスト、キャロライン・ペレス氏による「存在しない女たち」にあるように、ルールやサービスを提供する側に差別意識がなかったとしても、「気付かない」ことによって、少数派とされる人たちに不具合を押しつけてしまうことがあるかもしれません。インクルーシブな社会を実現するための本質的な課題はなんでしょうか。

### 地方（移住／観光／地域コミュニティ／医療）

地方における人口減少や高齢化は深刻で、都市部との格差は拡大するばかりです。2021年生まれ約81万人のデータを見ると、その3割は東京圏の生まれです。いわゆる地方から東京に出て、ある年齢になったらまた帰るという「ふるさと回帰」の動きはどんどん弱体化していくでしょう。先ほど触れたように、人口減少局面においては、過剰設備などの問題もあります。こうした中、地方自治のあり方、地域コミュニティや地域医療はどうアップデートしていくべきでしょうか。また、移住や観光による地域活性化はどうあるべきでしょうか。

### 外交・安全保障／経済安全保障

ロシアのウクライナ侵攻、世界各地における権威主義の台頭やポピュリズムの高まりは、日本を取り巻く安全保障環境や国際協調に大きな影響を及ぼしています。中国の台頭は経済安全保障などの要請も高めています。国際社会における対立・分断が広がりつつある中で、日本社会はどうあるべきでしょうか。

### 気候変動・生物多様性

今年の夏も非常に暑く、地球温暖化を実感せずにはられません。海面水位の上昇、異常気象など、既に世界中で気候変動の影響が顕在化しています。そしてその影響は、農業生産、生態系保全、エネルギー供給、インフラなどあらゆる分野に及びます。官民や個人が一致団結して取り組むための課題はなんでしょうか。

総論的な分野に着目するにせよ、切り口に着目するにせよ、社会システムをどのようにアップデートしていくべきかの議論の中では、官民や個々人の「公」はどのように発揮されるか、についても示していただくようお願いいたします。

なお、こうした社会課題を解決し、社会システムをアップデートする手段として、発達が目覚ましい情報通信技術、AI 技術、DX を活用することも考えられます。技術の発達は思いもよらない速度で進展し、社会システムのアップデートを促進する要因にもなります。未来のあるべき姿を構想し、そこからバックキャストして我々のなすべきことを考えるなど、未来志向の視点は不可欠になってくるでしょう。

### **3. 個人の「公」を育む**

未来のあるべき姿を検討するにあたって、先んじて「公」のために動いている個人の例は、社会の中にたくさん見つけることができます。昨年度のフォーラム活動の中でも、こども食堂を始めた方やクラウドファンディングで資金を集めて支援を行っている方々と出会いました。ただ、それは個人の善意や強力な想い・行動力に依存している場合が多く、仕組みで回す形になっていません。サステイナブルに社会全体のムーブメントにするためには、「点」の活動を「つながり・広げる」人が大事だ、とも実感しました。

2. で社会システムのアップデートを考えていただくときに、「官民や個々人の『公』はどのように発揮されるでしょうか」と記載しているように、その社会課題の解決のために横串で、官民・業界を越えて、人々がつながり連携していくことが必要だと考えます。その時に、そのような「つながり」を広げていく人を育むには、どうすればよいでしょうか<sup>8</sup>。

先ほど「公」には2つの側面があり、日本人には「おおやけ（国・権威）」に依存する傾向が強いとの指摘について触れましたが、これは変えることはできないのでしょうか。どうすれば「公」の考えが一人一人に浸透するのでしょうか。「自分達が世界を変えられる」という意識・行動はどのように育むことができるのでしょうか。

情報通信技術の飛躍的な進歩は、人びとの生活・思考スタイルにも影響を与えており、例えば、インターネット上のニュースや SNS で自らの検索結果に応じて関心の高い情報が自動的に提示される中で、人びとは自らが見たい情報だけを見る状況が生まれています。また、SNS でより増幅されるネガティブな論調、あらさがし、同調圧力。デジタルネイティブで育った Z 世代は安定思考で自分の世界を広げることに消極的だと聞きます。こうした中で個々人の「公」をどのように育むか、発揮してもらうかということも、考えていただければと思います。

---

<sup>8</sup> 3. では「人」に着目していますが、つながり・広げるための組織の行動は 2. でも考えられるかもしれません。

#### **4. まとめ**

ここまで、様々な局面変化が起こっている中でよりよい社会を次世代に引き継ぐために、「公」を育むことについて私なりの問題意識を述べましたが、もちろん「個」を否定しているわけではありません。「個」を伸ばした上で、伸ばした「個」を「公」のために発揮できることが大事ではないか。個人がこれまで以上に主体的に活動できる／活動することが求められている時代だからこそ、誰もが「公」の意識を育むこと、「公」のためにつながり横串で連携を広げていける人を育てていくことが必要なのではないか、という問題意識です。浩志会の設立趣旨も「人材育成」であり、考えてみたいと思っています。

いずれにせよ、『個』と『公』は相対するののか、『公』を育むことが本当に社会課題を解決するのか、「みんなが『公』を育む必要はないのではないか」といった視点など、研究テーマに対する疑問点も含めて、大いに議論していただければと思います。

最後に、私がこのテーマに込めた皆さんへの投げかけを改めてまとめます。

- ① 成長から成熟へ、人口増から人口減へ局面変化が生じ、個人が主体的に動く時代にあって、官民が連携して、誰もが「公」を発揮できるように、どのような社会システムをどのようにアップデート／デザインしていくべきでしょうか。
- ② 上記を実現するために、横串で、官民・業界を越えて、人々がつながり連携していくために、「つながり」を広げていく人、個人の「公」を育むために、社会全体で何に取り組むべきでしょうか。
- ③ 上記を実現するために、私たち一人一人は自らどう行動すべきでしょうか。

是非、今後の日本のあるべき姿・どのような社会を次世代に引き継ぎたいかというビジョンを基に、議論いただければと思います。

#### **5. 研究会員活動を進める上での留意点**

最後に、研究会員活動を進める上で、皆さんに留意して頂きたいことを述べたいと思います。

まず、活動に参加する上での心構えです。皆さん日々の業務で忙しいとは思いますが、ぜひ当事者意識を持って積極的な参加をお願いします。浩志会には、官民それぞれから多様なバックグラウンドを持つメンバーが参加しています。普段の業務を離れて純粋に議論を楽しみ、自分自身が成長・アップデートするのを楽しんでください。深く議論し合った仲間は、一生の財産となります。活動に積極的に参加し、一生のつながりを築いてほしいと思います。

浩志会の「ことわらない」の精神は、皆さんの活動の充実度・完成度を高めるため、当事者意識を持ってもらうために存在しています。大変だなあと思わずに、一步踏み出してみてください。必ずそこから得られるものがあるはずです。

次に、フォーラム活動についてです。毎月の定例会における議論では、一度は発言するなど、積極的な参加をお願いします。また、お互いを **Respect** し、本音で議論してください。一人で考えることには限界があります。一人一人が意見を持ち寄ることにより、どんな発展が見られるでしょうか。

また、会議室における議論だけでなく、フィールドワークへ出て様々な人と出会い、様々な経験を楽しんでください。濱口専務理事の座右の銘をお借りすれば、「百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず」です。実践・行動することで新たに見えてくる世界が必ずあります。

夜の懇親会や分科会のイベントも、コミュニケーションが深まる良い機会です。積極的に参加し、横のつながりを広げてください。

浩志会という場にはイノベーションが生まれる要素があります。イノベーションは、複数の既存の知の新しい組み合わせから生まれるもので、そのための方法は大きく二つあります。一つは、組織のなかに多様な人材を入れること、もう一つは、外に出て多様な経験をし、人脈を広げることです。一つめの「組織のなかに多様な人材を入れること」について、浩志会には様々な省庁・企業からメンバーが集まっています。二つめの「外に出て多様な経験をし、人脈を広げること」について、フィールドワークによって普段なら出会えないような人に話を聞くことや、行けない場所に行くことも浩志会なら可能です。

皆さんの活動から、どのようなイノベーションが生まれるでしょうか。ぜひ、一步踏み出して、様々な経験に自ら身を投じてほしいと思います。

最後に、浩志会は、日本や世界の発展のため、私たち自身がどう行動すべきかを重視しています。研究テーマについて理論や概念を整理することも大事ですが、それを机上の空論としないことも大事です。活動を通じて、自分達自身がどう行動していくべきなのか。中間全体研修会、及び最終全体研修会で素晴らしい発表がなされることを期待しています。

この1年は、大いに議論し、経験し、自分を変え、そして社会を変えていくためのまたとない機会です。1年間、浩志会での議論を楽しみ、一緒に成長していきましょう！

※本稿における意見・考え方は、筆者の個人的な見解であり、浩志会及び筆者の所属組織とは無関係であることをお断りいたします。